

石川県白山自然保護センター普及誌

## はくさん

特集：白山で活動する人たち

第48巻 第3号

## 目次

- P 1  
柴山潟から望む白山  
南出 洋  
宮崎 顕治
- P 2  
石川県自然解説員  
研究会  
奥名 正啓
- P 5  
環白山保護利用管  
理協会  
稲葉 弘之
- P 8  
白山国立公園パー  
クボランティア  
大石 佳織
- P 11  
白山の自然を守る  
ために活動している  
人々  
平松 新一
- P 12  
石川県内に生息す  
る冬のニホンジカ  
一狩猟者の聞き取り  
調査の結果から一  
小川 弘司  
稲田 奈緒
- P 16  
センターの動き



柴山潟から望む白山

加賀地方平野部からの白山眺望のベストポイントの1つとされる柴山潟は、白山の西側に位置することから、最高点である御前峰と大汝峰とが均衡した形で見えます。気高く流麗な稜線を描く白山の山容と湖面との調和は、地域住民はもちろん、片山津温泉を訪れる観光客をも魅了しています。

その眺望について、加賀市大聖寺出身の作家である深田久弥は、著書「日本百名山」で「加賀の平野でも最上の眺めで自信をもって誇る」と記しており、白山へのなみなみならぬ愛着を語っています。

柴山潟では、冬には主にコイ・フナ漁が行われており、湖面にはマガモ・コガモ・ヒドリガモなど渡り鳥や留鳥のカルガモが数多く集まります。また、周辺の田んぼでは群れをなすコハクチョウを見ることができます。白山の美しい眺めと併せて、これらの鳥たちも観察してはいかがでしょうか。

(写真：南出 洋、文：宮崎 顕治)

# 石川県自然解説員研究会

奥名 正啓（石川県自然解説員研究会）

石川県自然解説員研究会は、ボランティア精神に基づく自然解説活動、石川県内における自然環境の保全、自然保護思想の啓蒙普及を目的として活動しています。活動は夏の白山室堂、南竜ヶ馬場における自然観察会以外に、能登地区、北加賀地区、南加賀地区における自然観察会、ツキノワグマ餌資源調査、「石川の自然」写真展、白山市白峰の白山高山植物園オープンガーデンでの解説など、年間を通して石川県の自然に関する普及啓発を行っています。

## 石川県自然解説員研究会発足と歩み

白山が昭和 37 (1962) 年に国立公園に指定され、ちょうど 20 年目にあたる昭和 57 (1982) 年 5 月、石川県環境部自然保護課主催による自然解説員養成講座が開講され、40 名が受講し白山自然解説員として認定されました。そして翌 58 (1983) 年石川県自然解説員研究会としてボランティア組織化し現在に至っています。令和 2 (2020) 年現在の会員数は 96 名で、主な歩みは以下の通りです。

- 昭和 57 (1982) 年 白山自然解説員認定
- 昭和 58 (1983) 年 石川県自然解説員研究会発足 室堂での自然解説開始
- 昭和 59 (1984) 年 別当出合～室堂登山道自然解説開始
- 昭和 61 (1986) 年 「白山の自然教室」を題材として「白山の高山植物と白山登山」を開始  
後に県民白山講座「白山登山と高山植物のつどい」に発展
- 昭和 62 (1987) 年 白山以外で初めて、夕日寺健民自然園にて自然観察会を開始
- 平成 10 (1998) 年 別当出合～南竜登山道での自然解説開始
- 平成 11 (1999) 年 南竜ヶ馬場での自然解説開始
- 平成 12 (2000) 年 医王山ビジターセンターオープンに伴い大池平間の自然観察会開始
- 平成 13 (2001) 年 「いしかわの自然を楽しむ」<sup>かえで</sup> 楓工房より出版
- 平成 19 (2007) 年 クマ餌資源調査開始
- 令和 元 (2019) 年 白山高山植物園での解説開始

## 現在の活動

### 白山地区

毎年 7 月、海の日を含む 3 連休から解説活動を開始し、翌 8 月中旬までの 1 ヶ月間室堂および南竜ヶ馬場に 2 名ずつ常駐し、ひとり 3 日間活動します。室堂では早朝ご来光の時刻に合わせて山頂に向かい、ご来光を拝んだ後観察会参加者を募集し、かつての火口跡お池巡りコースを約 1 時間ほど自然解説を行います。白山は現在火山活動は沈静化しているものの、れっきとした活火山です。したがってこのお池巡りは火山としての認識を改めて持ってもらうのに絶好のコースです。また午後 3 時と 4 時の 2 回それぞれ約 40 分、室堂平にて観察会を行います。特に早朝、別当出合を出発してきた登山者にとってはひととき高山植物が疲れを癒やしてくれます。

一方南竜ヶ馬場では朝 5 時に早朝観察会、午後 3 時と 4 時に南竜庭園やテントサイト周辺の観察会、さらに夕食後の 6 時頃から南竜ビジターセンター 2 階にて高山植物を中心としたスライドを上映します。どの観察会においてもマニュアルというものはあり



写真 室堂での自然観察会





南竜ヶ馬場での自然観察会

ません。それぞれの解説員がその時々に応じて内容を組み立てて行いますので、参加するたびにいろいろな話が聞ける楽しみがあります。

観察会以外の時間は登山者の問い合わせ対応を行っています。登山道で見かけた花の名前や気になる花の開花状況、どこに行けば見ることができるのかなど、さらに登山道の状況やこれからの天気や明日の天気まで聞かれることもあります。登山道では土曜日、日曜日に要所要所で解説を行っており、登

山者の声にも応えています。

また、人気一番のクロユリの問い合わせも多く毎年定点（室堂平2ヶ所 南竜ヶ馬場2ヶ所）で開花状況の調査も行っています。主要な高山植物については開花状況や結実状況などを調査し「白山の花暦」として継続して記録しています。

夏山開山前6月中旬頃には白山自然保護センターとともに「白山登山と高山植物のつどい」を開催し、高山植物の紹介、白山に関わる講演と情報提供はもとより登山相談にも乗っています。

### 各地区（能登、北加賀、南加賀）での観察会

それぞれの地区において年間4回自然観察会を行っています。毎回場所を変えて北は舳倉島から南は加越国境まで広く観察会を通じて県内の素晴らしい自然を紹介解説しています。また、医王山ビジターセンターから大池平の間では定期的に年5回観察会を行い季節の移り変わりも感じてもらっています。



夕日寺健民自然園での自然観察会

### クマ餌調査

石川県から受託して、平成19（2007）年よりクマの主な餌となるドングリ類（コナラ、ミズナラ、ブナ）の生育状況を調査しています。5月に落下した雄花の数を数え、その年の秋のなり具合を予想し、8月にドングリ類が豊作か凶作か着果状況を調査しクマの出没を予想する材料とします。調査地点はかつては生息していなかった能登でも目撃されたため石川県内全域に広がりコナラ、ブナ、ミズナラ、各20ヶ所程度となっています。

### 「石川の自然」写真展

本会が平成15（2003）年に設立20周年となったのを記念して始めたもので、石川県の自然の素晴らしさと石川県自然解説員研究会の活動を広く一般に紹介するものとして大変意義のあるものです。会場は金沢市、白山市、能美市、小松市を毎年順繰りにまわっています。

### 白山高山植物園

白峰西山地区にある白山高山植物園は駐車場から徒歩10分程でお花畑に到着でき、白山に生育する高山植物の多くを気軽に観察できることから近年関東や関西など遠方から大型バスツアーでの来場者が増え、園内をガイドする要員が必要となったため当会の会員が協力することになりました。期間は6月初旬から7月中旬まで行っています。



白山高山植物園での高山植物解説

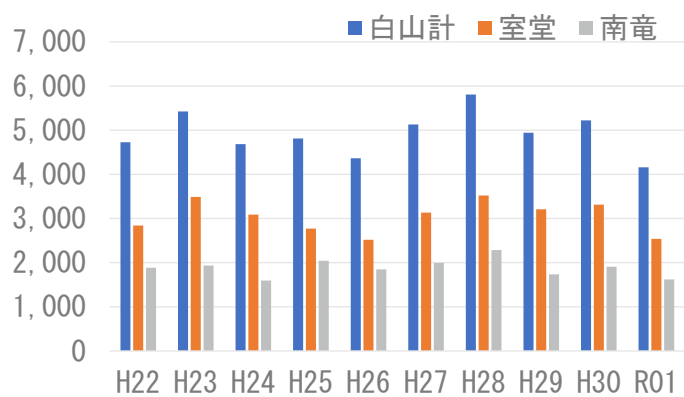
## 活動の成果、課題、今後

主たる活動の場である白山での観察会への参加者は開催期間中 5,000 人前後、一日あたりでは約 160 人となっています。直近 10 年では大きな変化は認められません。申込みが必要なく、しかも無料ということで多くの方が参加して下さり好評を得ています。県内の登山者は日帰りが多く、かえって遠方の関西・関東や東北からの宿泊客の参加が多いようです。これまでは高山植物を解説するにあたって、じっくり観察してもらうためにどうしても密集密接状態になってしまいがちでしたので、今後これを避ける工夫が必要になります。近年は外国人も多くなり、時にあまりの軽装に驚くことがあります。また、トレラン（トレイルランニング：山岳の登山道でのランニング）もよく見かけるようになり、高山で走る危険性や自然荒廃の懸念などの不安もぬぐえません。

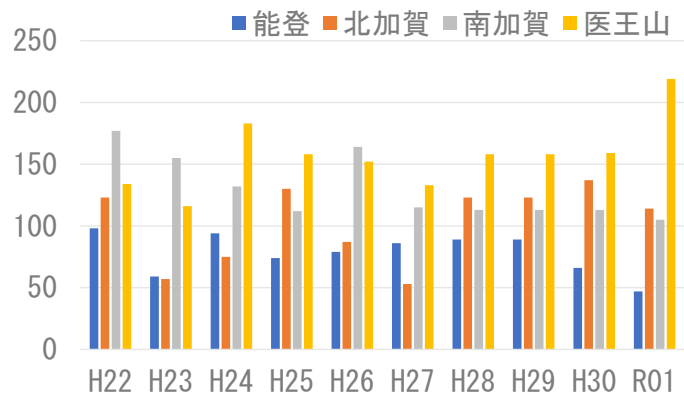
各地区での観察会においては、毎回開催場所を変え季節を変えて、石川県内の自然を楽しみながら素晴らしさを紹介解説しています。年間 500 名ほどの参加をいただいています。リピーターが多くまた若い人が少ないのが現状です。より広く若い人たちにも気軽に参加できる魅力的な活動を目指すとともに、様々なメディアを通じた周知のしかたについても検討の余地がありそうです。

現在会員はおおよそ 100 名で、その内訳を見ると地域的に能登地区が非常に少なく、かたよりが大きく、年齢的に高齢者が多く 60 歳代以上が 3 分の 2 を、特に 70 歳以上が 3 分の 1 を占めています。また、新規入会者は毎年 4 名前後しかおらず、このまま推移すると高齢化が進むだけでなく会員数の減少が避けられません。10 名ほどの新規会員を求めています。応募者自体が少なく苦慮しています。募集についても周知手段が限定的であって広く知られていないことによるものと思っています。今後は積極的な募集活動により会員増をはかりたいと思います。

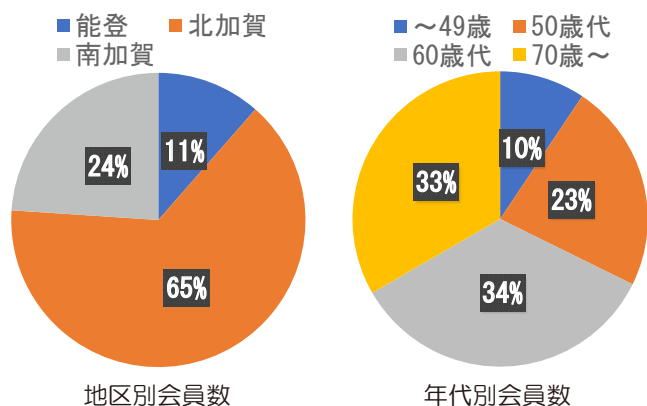
これまで、石川県、環境省を初めとする様々な方面からたくさんの支援をいただき、皆様の期待に応えるべく活動してきました。その評価は皆様にゆだねるとして、今後も観察会を通して白山はもちろんのこと石川県内の自然を身近なものとして感じ、考え、そして楽しんでもらえるよう活動していきます。



白山観察会参加者数の推移



地区別観察会参加者数の推移



# 環白山保護利用管理協会の活動 —より良い環白山地域の未来に向かって—

稲葉 弘之（NPO 法人 環白山保護利用管理協会）

## 環白山保護利用管理協会とは？

環白山保護利用管理協会は「守ろう！活かそう！伝えよう！白山！」をスローガンに平成 19(2007)年 1 月に設立された団体です。平成 29 (2017) 年には特定非営利活動法人 (NPO 法人) の法人格を取得し、現在は 35 団体、1 個人の正会員、4 県 6 市 1 村の特別会員が所属しています。環境省、国土交通省、森林管理署などの国の機関や白山比咩神社しらやまひめをはじめとする 3 神社も顧問として当協会を支援してもらっています。また、白山ユネスコエコパークの管理運営を担う団体である白山ユネスコエコパーク協議会に民間団体として唯一、委員となっています。

白山国立公園は石川県、福井県、岐阜県、富山県にまたがっていますので、私たちの協会ではこれら国立公園の範囲とその山麓の地域を「環白山地域」として捉え、産学官民の立場を越えた団体で一体となって地域を創造し、活性化を目指して活動しています。



環白山地域の産学官民の知恵が集うラウンドテーブル

## 白山での活動

当協会の活動フィールドは石川県だけに留まらず、白山国立公園を取り巻く 4 県にまたがります。行政が行う取り組みはその行政単位の枠を越えての活動は難しいことが多かったのですが、私たちはその枠を越えて、白山国立公園全域と白山を支えて頂いている山麓の地域で活動しています。活動の内容としては以下のものがあります。

- ①白山の自然環境の保護と利用に関する活動および普及啓発  
(外来植物対策事業、山岳湿原保全事業、登山施設維持管理改善事業など)
- ②白山に関わる諸団体との連携  
(白山ユネスコエコパーク協議会への参加、地域連絡会議の開催など)
- ③白山の自然環境の保全管理や公園施設の管理に関する業務の受託  
(環境省中部地方環境事務所、石川県からの請負業務の受託など)
- ④エコツーリズムを活用した地域振興、調査・支援  
(各地域でのエコツーリズム実施支援、地域活性化事業など)

## 白山での外来植物対策事業

当協会の活動で最も幅広く継続的に実施している活動が外来植物対策事業です。白山国立公園での外来植物除去活動は平成 16 (2004) 年に白山自然保護センター主催ではじめて開催されました。平成 19 (2007) 年からは当協会も共同主催に関わり始め、現在まで 17 年間毎年、実施しています。

また、除去活動は「白山生態系維持回復計画」に基づいて行われており、当協会はこの制度で行わ



れる計画の実施主体として全国で初めて認定を受けた民間団体です。

初期のころの外来植物除去作業は室堂園地と南竜ヶ馬場園地の2ヶ所で行われていました。室堂園地、南竜ヶ馬場園地にはともに山小屋があり、多くの登山客で賑わう場所でもあります。一方で外来植物の生育量も多く、また、この2ヶ所から外来植物の生育が周辺に広がっていく危険性ももっていました。ですので、この2ヶ所で重点的に除去作業を行うことは非常に重要なことであり、できるだけ多くの方に参加してもらう必要がありました。



南竜ヶ馬場野営場での除去作業

特に南竜ヶ馬場園地においては本来であれば高山・亜高山域に生育しない低地性植物のオオバコがたくさん生育していました。南竜ヶ馬場園地にはいしかわレッドデータブック2020で絶滅危惧Ⅱ類とされているハクサンオオバコが生育しています。南竜ヶ馬場野営場ではこのハクサンオオバコと外来植物であるオオバコが隣接して生育しており、交雑が懸念されていたため、特に力を入れて活動しています。残念ながら現在では雑種の生育が確認されており、併せて除去も行っています。

活動は除去作業を行ってもらえる一般ボランティアを募集し、1泊2日で行います。ボランティアには現地集合、現地解散で参加して頂き、山荘で事前レクチャーを行った上で除去作業を行ってもらいます。日頃から白山登山を楽しんでいらっしゃる方から「恩返しの意味で参加しました」という言葉を聞くと、白山がどれだけ地元の皆様にも愛されている山かを実感することができました。



オオバコ相撲の開催

また、活動時には除去したオオバコの花柄を交差させて引っ張り合う「オオバコ相撲」の開催、除去したオオバコを乾燥させて茶葉を作り、煮出して淹れた「オオバコ茶」の提供、就寝前に少しお酒の入った「交流会」、「ご来光ツアー」などお楽しみ企画も実施し、少しでも参加者に楽しい思いをしてもらう工夫も行っています。

平成20(2008)年からは白山登山の玄関口でもある市ノ瀬園地でも除去作業を開始しました。市ノ瀬園地は登山者の駐車場として利用され、その駐車場に生育する外来植物の種子が登山者により運ばれていることが予想されていました。そこで共同主催者である白山自然保護センターと協議し、未舗装の駐車場において特にオオバコ除去のイベントを新たに企画し、実施しました。市ノ瀬園地まではマイカーで来訪できるため、登山をしなくても活動に参加できることから、普段登山をしない方、ご家族連れをターゲットにでき、普及啓発効果も期待できました。

活動開始当初は50名程度の参加者でしたが、最近では毎年、100名以上の参加者のご協力があり、オオバコの生育量も減少しています。

ただ、これら毎年行っている活動も、今年はコロナ禍の影響でほとんど実施できませんでした。

## 他県への除去活動の拡大

外来植物の問題は石川県側だけではなく、隣県でも同じように問題が生じています。そこで、平成21(2009)年からは福井県、岐阜県に活動を拡大しました。

当協会は隣県の3県にも多くの会員が所属しており、福井県、岐阜県の会員に呼びかけ、各地域で当協会が開催している地域連絡会の場で地元の方の思いも聞きながら、イベントを企画しました。

地元の協力者が得やすい場所、比較的アクセスが容易な場所、より効果が得られる場所など開催場所などを検討しました。併せて市や村など行政の協力もお願いし、広報への掲載や活動への参加等の協力を頂きました。福井県では赤兎山避難小屋、三ノ峰避難小屋、岐阜県では石徹白大杉、神鳩ノ宮

避難小屋、銚子ヶ峰や大白川園地、三方岩岳園地など各所で除去作業を行いました。

特に岐阜県郡上市石徹白地区では地域で主催する清掃登山のイベントの中で除去作業を行っており、国の特別天然記念物にも指定されている「石徹白大杉」では、地元の小学生や保護者の方に参加して頂き、外来植物の問題に触れる良いきっかけを作り出しています。



石徹白大杉での除去作業

### 登録ボランティア制度による自主的除去

当協会では白山自然保護センターとともに個人が自由に除去を行える登録ボランティア制度を導入しています。除去を行う場所は国立公園特別保護区も含まれるので、外来植物と言えども植物の採取には許可が必要になり、イベント時しか除去ができません。そこで個人が登山の際に自由に除去ができるようにする仕組みを作れば、色々な場所で除去が可能になるというものです。



登録ボランティアの研修会

夏山シーズン前に事前研修会を開催し、注意事項を伝え、受講者にはIDカードを発行し、そのカードを携行して除去をしてもらいます。この制度により、イベントを開催しにくい登山道での除去も可能になり、登録者は登山の際に短時間でも除去ができるようになりました。毎年、60～70人の方が登録して頂いています。

### 民間企業からの協賛、社会貢献活動

当協会では外来植物除去活動に対して積極的に民間企業や各種団体の「力」を取り入れています。イベント時の参加特典として、宿泊費の割引、各企業からの協賛品、温泉入浴券などをご提供頂くなど次の活動にも参加しようという気持ちを参加者に持ってもらえるよう配慮しています。

また、市ノ瀬での除去作業では当協会の会員企業を通じ、社会貢献活動として参加してくれるよう呼びかけました。その結果、平成21(2009)年からは「建設コンサルタント協会北陸支部」の所属企業の方々が毎年、30～40人の大人数でご参加頂き、除去に貢献して頂いています。

さらに、白山商工会が取り組む「白山きりまんじゃろプロジェクト」はタンザニア産のキリマンジャロのコーヒー豆を使用し、白山の伏流水で淹れたコーヒーを販売し、売り上げに応じ、当協会とタンザニアで植林を行っている団体に寄付される仕組みです。当協会に頂いた寄付金は全額、外来植物除去の活動に使用させて頂いています。

このように当協会では民間団体としてのフットワークの良さを最大限に発揮し、積極的に民間企業の力を取り入れています。

### 除去活動の継続

白山には人々を魅了するたくさんの魅力があります。これからも白山には多くの人々が訪れることでしょう。一方で白山に人が訪れる以上、外来植物の問題は切り離すことはできません。これまでの除去活動により少しずつ成果は現れていますが、終わりは見えません。当協会では地域の方々、行政、多くの白山ファンとともに、これからも外来植物除去活動を継続していきます。各イベント等のご案内は当協会HP (<http://kan-hakusan.jp/>) に掲載されています。皆さんもぜひ除去活動にご参加ください。



# 白山国立公園パークボランティア

大石 佳織（環境省白山自然保護官事務所）

みなさんはパークボランティアをご存知でしょうか？

パークボランティアは環境省が設置しているボランティア組織で、昭和 60（1985）年に発足しました。日本には 34 の国立公園がありますが、このうち 24 の国立公園で約 1,400 名が登録され活動しています。白山国立公園でもパークボランティアは活動しており、現在約 40 名が登録されています。

## パークボランティアの目的



パークボランティアの帽子とワッペン

では、パークボランティアはどのような目的で設置されているのでしょうか。「パークボランティア設置要綱」では「国立公園及び国民公園（以下、「国立公園等」という。）の保護管理、利用者指導又はこれらの一環として行われる各種活動について、広く国民の参加を得ることを通じ、これらの活動のいっそうの充実を図るとともに、自然保護思想の普及啓発を図ることを目的として、国立公園等にパークボランティアを置く」とあります。

わかりやすく言えば、パークボランティアの設置目的は、「環境省と国民とが協力して、施設の清掃や簡単な修繕などの管理を充実させ、来訪者が国立公園等を気持ちよく利用できるようにすること、自然を守りながら楽しむためのルール・マナーや自然の仕組みを来訪者へ伝え、美しい自然を残していくこと」です。

## パークボランティアの活動

先ほどのパークボランティア設置要綱にはその活動内容も示されています。それによると「各地区の状況に応じ、自然解説、利用者指導、野生動植物の保護管理、調査、公園利用施設の維持修繕及び美化清掃等への協力とする」となっています。

パークボランティアの設置目的は共通していても、実は全国各地のパークボランティア活動には、国立公園や地域ごとに特色があります。例えば、大雪山国立公園のように登山道の補修や整備を行ってきたところもあれば、富士箱根伊豆国立公園の箱根パークボランティアのように定期的に自然観察会を



パークボランティアの活動（看板の設置・清掃）

開催しているところ、さらには、日光国立公園の日光パークボランティアのようにニホンジカの食害調査などに取り組んでいるところもあります。このように各地域で特色がみられるのは、パークボランティアが地域の事情や課題に応じて様々な活動を行っているためです。

## 白山国立公園パークボランティアとその他のボランティア

白山国立公園の特徴として、複数のボランティア団体が自然公園の維持・魅力の発信を担っていることが挙げられます。例えば、高山植物等を解説するボランティアや、市ノ瀬ビジターセンター、中宮温泉ビジターセンター・中宮展示館で周辺のガイドウォークを行うボランティアがいます。しかし、



これらの方々はいずれも白山国立公園パークボランティアとは別のボランティアで、前者が石川県自然解説員研究会、後者が石川県の白山自然ガイドボランティア友の会です。

ここで、白山国立公園パークボランティアは何をしているか、気になる方がおられるかもしれません。そこで次項ではこの活動を紹介しましょう。

## 現在の活動内容

現在、白山国立公園パークボランティアは、登山道沿いのごみ拾いや看板等の清掃といった美化活動や施設の維持に関わる活動を多数行っています。ここでは活動のうち、いくつかを紹介したいと思います。

### 雪解け後の別当出合周辺の清掃・管理

まずは、別当出合で雪解け後に行われる活動についてです。

別当出合駐車場は白山の登山口にある駐車場で、マイカー規制が行われている日を除いて、多くの登山者に利用される場所です。この駐車場は冬の間は雪に閉ざされていますが、雪解け後すぐに使用できるわけではありません。秋に降り積もった大量の落ち葉や風雪によって折れた枝が辺り一面に散乱し、雪解け水によって流されてきた石や土砂が側溝や集水枡に溜まり、年によっては雨天時に水があふれるような状況になるためです。さらに、別当出合休憩舎周辺では、登山者が落としてしまったゴミも雪の間から出てきます。そのため、白山国立公園パークボランティアは毎年5月中旬頃に別当出合の駐車場とその周辺、側溝の清掃を行い、登山者を迎える準備をしています。



別当出合駐車場の清掃

### 夏山シーズン前の避難小屋清掃

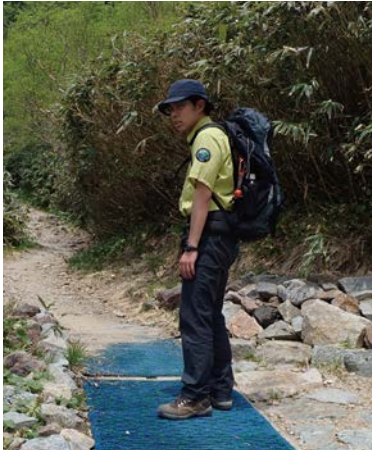
夏山シーズンが近づくと、最も利用者が多い登山道、砂防新道沿いにある甚之助避難小屋の清掃も行います。この小屋は冬期も開放されているため、積雪期に登山される方々に利用されています。しかし、冬期には清掃等が行われていないので、室内、冬期トイレともにひと冬分の汚れが蓄えられます。そこで、雪解けが進んで一般登山者が入山し始める前に室内と冬期トイレの清掃を行っています。清掃道具の雑巾やほうき、トイレ用ブラシ等はもちろん持っていきますが、開山前のために水場が利用できないので清掃用の水も1人2リットル以上担いで登り、清掃をしています。

### 外来植物種子除去マットの清掃

夏期には登山道に設置されている外来植物種子除去マットの清掃を行っています。ここで言う「外



甚之助避難小屋の清掃



種子除去マット

来植物」とはもともと白山に生育していなかったのに人によって持ち込まれた植物のことを指します。外来植物の種子は登山者の靴に付着して白山の山の上にまで運ばれ、生態系へ悪影響を与えてしまいます。これを防ぐため、白山国立公園では靴に付着した種子を落としてもらうためのマットを各地に設置しています。

しかし、マットはただ設置すればいいわけではありません。定期的に管理をしないと土砂でマットが詰まったり、マットの下に土砂が溜まったりして、その機能が失われてしまうのです。白山に設置されているマットのうち、砂防新道の甚之助避難小屋付近（標高 1,970m）にあるマットの清掃は白山国立公園パークボランティアが担っています。

なお、マットの下に溜まった土砂には外来植物の種子が含まれており、その場に放置することはできません。そのため、総重量が 40kg 近くになることもある土砂をパークボランティアが分担して担ぎ下ろしています。甚之助避難小屋から国立公園の外まで土砂を下ろすには、多くのパークボランティアの協力が必要になります。

これらの活動は地味で目立たず、体力や腕力が必要な場面も多くあります。しかし、体力がある人はたくさん動く、腕力がある人は重いものを率先して運ぶ、腕力や体力がなくても細かいところが見える人は丁寧に掃除し、皆が気付かないごみを集める等、活動に参加する会員はそれぞれが自分でできる範囲で役割を果たし、いつも見事なチームワークを見せてくれます。活動に参加する会員が作業後に見せる笑顔はいつも輝いていて、とても充実していることを実感します。



種子除去マットの清掃

## 募集と構成

白山国立公園のパークボランティアは設置当初、石川県自然解説員研究会の会員の中から登録を行っていました。しかし、活動が石川県内に限られる等の課題が生じたため、4 県（石川、福井、岐阜、富山）にまたがる白山国立公園全域での活動を可能にするため平成 21（2009）年に登録方法の見直しを行い、公募によって募集する形となりました。現在は環境省中部地方環境事務所白山自然保護官事務所が事務局となって、募集や運営を行っています。

登録方法見直し当初は会員数が 6 名でしたが、増員を重ね、令和元年度の募集で約 40 名となりました。会員の男女比は約 6：4 で、年齢は 20 代～70 代と幅広く、職業や趣味は多種多様です。自然に詳しい人もいれば、動植物の種名は全くわからないという人もいます。共通しているのは、白山が好きということです。

白山国立公園パークボランティアの募集は欠員が出たり、増員が必要になったりした場合に不定期に実施しています。募集情報は環境省の中部地方環境事務所のホームページに掲載する他、アクティブ・レンジャー日記やチラシ等でも発信します。気になる方は定期的にご覧いただければと思います。＊パークボランティアの募集や登録は地区ごとに実施されます。パークボランティアになるには、希望する地区で応募する必要があります。また、各地区で実施される養成研修を受講・修了することが登録要件になっていますので、ご注意ください。

※ここで使用した写真は白山国立公園パークボランティアの皆さんが撮影したものです。



# 白山の自然を守るために活動している人々

平松 新一（白山自然保護センター）

令和2（2020）年は白山に登山する方々の様子がいつもと大きく違っていました。夏に白山に登ると、例年なら多くの団体とすれ違うのですが、今年は新型コロナウイルス感染拡大防止のためか、団体の姿をほとんど見ることがありませんでした。別当出合では登山者に対して検温が行われ、室堂や南竜山荘でも検温のほか、寝具持ち込み、宿泊数の制限などが実施されました。



今年も美しい姿を見せてくれた白山

このように登山者や施設の様子はずいぶん違っていました。白山自体はいつもと変わらない美しい姿を見せていました。このような美しい白山に登ることができるのは、白山の自然を守るために様々な活動

をしている多くの方々の努力があるからなのです。しかし、実際には白山でどんな方々がどんな活動しているかは、あまり知られていません。そこで本号では、白山の自然を守る活動を行っている方々について焦点を当て、そのうち石川県自然解説員研究会、環白山保護利用管理協会、白山国立公園パークボランティアの方々から、その活動内容について紹介いただきました。



現地材を活用した登山道侵食箇所の補修作業（写真提供：白山の自然を考える会）

もちろん、これらの団体以外にも白山で活動している方々がたくさんいらっしゃいます。白山の自然を考える会は、県の委託により別山市ノ瀬道の維持管理を行っており、草刈りや倒木の処理などを行っています。ネイチャープロジェクト白山は、白山登山のガイドを行ったり、白山ろくでブナの植樹活動等を行ったりしています。自然公園指導員の方々は白山国立公園内での登山道整備、利用者に対する指導、国立公園内の自然や登山道の情報収集・提供などを行っています。

また、<sup>いぬいやすし</sup>乾靖さんは、白山でのガイドを行っている傍ら、環白山保護利用管理協会の一員として県の委託により北部白山の登山道、山小屋の維持管理を行っています。<sup>よしふみ</sup>木村芳文さんは白山の自然を中心とする写真を撮影されている他、県の委託により<sup>ことさいみのる</sup>釈迦新道の維持管理を行っています。

これら白山の自然保護活動で忘れてはならないのが<sup>ことさいみのる</sup>殊才稔さんです。殊才さんは昭和49（1974）年から平成22（2010）年まで、主に白山自然保護センター職員として市ノ瀬駐在所（現市ノ瀬ビジターセンター）などで勤務していました。その当時、白山のゴミ持ち帰り運動の先頭に立ち、自らごみ籠を<sup>かご</sup>背負ってゴミ拾い登山を行っていました。おかげで、今も白山はごみのない美しい山として全国に知られています。殊才さんは惜しくも昨年亡くなりましたが、大きな声で純朴な性格が多くの方に親しまれていました。

ここに記したのはほんの一部の方々に、他にも多くの方々がこの美しい白山を守るために活動しています。皆さんも白山に登られる際にはこのような方々の努力をぜひ思い返していただきたいと思います。



殊才稔さん



# 石川県内に生息する冬のニホンジカ — 狩猟者の聞き取り調査の結果から —

小川 弘司・稲田 奈緒（白山自然保護センター）

## はじめに

10年ほど前、石川県内でニホンジカ（*Cervus nippon*）の姿を見ることは、ほとんどありませんでした。しかし、最近になってその姿を見かけることが、徐々に増えてきています。環境省（2015）の調査によると、2014年に能登地域でのニホンジカの日撃例が報告されるなど、石川県内での新たな日撃等の箇所が大きく増加しています。市街地へ出てきたり、あるいは白山の高山域にまでその姿が見かけられるようになりました。



冬に白山麓で目撃されたニホンジカの群れ

愛らしい姿をし、奈良公園のシカのように神の使いとも称されるニホンジカが見かけられることが良いことかといわれれば、そういうわけではありません。

ニホンジカは「生態系エンジニア（『自然保護』No.565, 2018）」とも称され、さまざまな植物を集団で大量に食べるため、生態系自体を大きく変えることが危惧される生き物です。

このまま、石川県内でその生息数が増加し生息域が拡大すれば、生態系を変えあるいは農作物への被害が増加していくことなどが予想されます。現在、石川県内に生息するニホンジカの推定生息数は、参考値として約1,200頭あるいは約2,600頭が示されています（『第2期石川県ニホンジカ管理計画』, 2018）。隣県の福井県嶺北地域のニホンジカは約24,000～40,000頭と推定されている（『第4期福井県第二種鳥獣管理計画（ニホンジカ）』）のに比べ、まだまだ大きな数字ではありません。ですが増えすぎる前に今のうちから対策を立てていく必要があります。

今回、石川県内でのニホンジカの冬場の生態を知るうえで、狩猟者への聞き取り調査を行いました。その結果について紹介します。

## 石川県におけるニホンジカの歴史

「最近になって姿を見かけるようになった」といいましたが、実はニホンジカは、石川県にもともと生息していました（表1）。能登町の真脇遺跡<sup>まわき</sup>など古くは縄文時代の遺跡からもニホンジカの遺物が見つかっています。江戸時代には、ニホンジカやイノシシの農作物被害を防ぐために、番小屋を設けて夜通し見張りをしたり、落とし穴や垣根を設けたり、また鉄砲を打ち鳴らしておどかしたり、そして捕獲もされていました。石川県内にニホンジカがいたことを示すように、「合鹿<sup>ごうろく</sup>・鹿泊<sup>かどまり</sup>（能登

表1 古文書に見るニホンジカの記録

寛政6年（1794）『山岸十郎右衛門家文書』（白山市白峰）  
本田・焼畑共猪鹿二被喰荒、無難取入之儀者稀成儀二而、年々及難儀相続茂、難相成もの共、多分有之（口語訳）  
田・焼畑ともイノシシ・シカに食い荒らされて、無事に収穫される事はまれで、年々面倒な事も続くようになっていく。うまくいかない者ども（イノシシ・シカ）が増えている、おそらく間違いない。

町)、「鹿渡島(七尾市)」などといった地名も残されています。

明治になると軍隊が能登島のニホンジカを全滅させる演習を行い、また狩猟による捕獲が促進されるなどその数を大幅に減らし、大正のころまでには県内ではほぼ絶滅しました。

### 狩猟者への聞き取り

鳥獣の狩猟期間は通常冬場に設定されており、イノシシやニホンジカの石川県内での狩猟期間は、現在 11 月 1 日～3 月 31 日となっています。つまり、冬場のニホンジカの生態を知るには狩猟者の方にお話を聞くことが良いわけです。

調査は、狩猟者の皆さんが県へ提出している出猟結果の報告をもとに、ニホンジカを捕獲あるいは目撃した方を選び、聞き取りしました。時期は 2017 年度及び 2018 年度の狩猟期間中のもので、2018 年及び 2019 年の 2 か年かけ、合計 18 名の方に聞き取りをしました。

聞き取り者の年齢は 60 代、70 代の方が多数を占め、銃猟歴 20 年以上のベテラン狩猟者が多くなりました。

聞き取り内容は、ニホンジカの捕獲・目撃地点、捕獲・目撃月日、個体数やオスかメスカといったことから、ニホンジカの生息場所の積雪や地形・植生、食性のことなど幅広く聞き取りしました。

### 得られたニホンジカの情報

調査の結果、ニホンジカを捕獲・目撃した地点すなわち生息確認地点として、2017 年度 34 地点、2018 年度 46 地点の合計 80 地点の情報を得ることができました。その位置を図 1 に示します。

これは、ニホンジカを捕獲・目撃した人すべてに聞き取りをしたわけではありませぬので、県内のニホンジカの捕獲・目撃情報のすべてを示しているわけではありませぬが、分布は、北は津幡町から南へ金沢市、白山市、能美市、小松市、加賀市にかけてとなりました。地形的には、金沢市から加賀市につらなる丘陵地を主に、白山市の手取川本流及びその支流の河川筋に至るところでした。

捕獲・目撃情報の内訳は、目撃地点が 46 地点と半数以上を占め、次に捕獲地点が 22 地点、捕獲と同時に目撃をした地点が 12 地点でした。ちなみに捕獲数は 1 地点で複数の捕獲がある場合もあり、実際の捕獲数については、2017 年度はオスが 36 頭、メスが 4 頭、不明が 2 頭の計 42 頭で、2018 年度はオスが 11 頭、メスの捕獲及び不明は 0 頭でした。捕獲はオスが主で、年度ごとで見ると 2017 年度の捕獲数が多かったのが特徴でした。

捕獲・目撃した個体が単独か複数については、単独個体が 47 地点と多くそのうち 33 地点をオスが占めました。複数個体は 33 地点でそのうちオスグループが 15 地点と多く、メスグループは 9 地点であとは不明です。

捕獲・目撃地点がどのような場所であったかについては、80 地点中 50 地点が森林内での情報でした。それ以外にも河川での

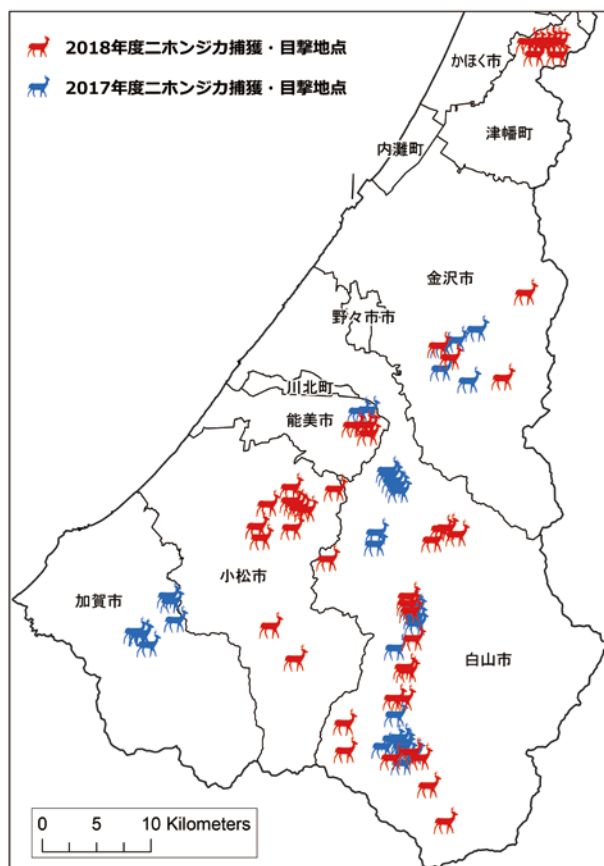


図 1 狩猟者からの聞き取りにより得られた冬季のニホンジカの捕獲・目撃情報

情報が9地点、道路沿いでの情報が7地点でした。道路沿いは、森林内での林道での情報で狩猟時の林道移動中のものがほとんどでした。時期については1月、2月の積雪が多い時期がほぼ半数を占め、特に2月の情報が約3割を占めました。

最後に積雪についてみると、2017年度と2018年度は対照的な年で、2017年度は雪が多く積雪が2m、3mでの情報がある反面、2018年度は雪が少なく、「なし」、「ほぼなし」との回答が多くを占めました。

次に聞き取りにより得られた冬のニホンジカの生息場所や生態について、特徴的なことを紹介したいと思います。

## 冬のニホンジカの生息場所

冬のニホンジカの生息場所について、多くの狩猟者が話されたことは雪に関してのことです(表2)。それは、「雪が多いと川まで下りてくる」、「雪が少ない時は尾根にいるが、多いと川に下りてくる」といったように、山から下ってニホンジカが川へ集まってくることや、「雪が多くなると少ない所を求めて尾根の低い所へ移動する」といった、尾根の末端にニホンジカが集まってくるということでした。

すなわち積雪量が増加すると、ニホンジカが山中から川や尾根の末端など低標高地へ移動することが指摘されました。

表2 冬のニホンジカの生息場所

雪に関すること	<ul style="list-style-type: none"> <li>・雪が多いと川まで下りてくる(複数回答)。</li> <li>・雪が多くなると少ない所を求めて尾根の低い所へ移動する(複数回答)。</li> <li>・雪が少ない時は尾根にいる。</li> <li>・足が雪に全て入ると歩けなくなる。</li> <li>・冬でも雪の積もらない平らな所にいる。</li> <li>・冬は断崖絶壁の雪の積もらない日当たりの良い所によくいる。</li> <li>・雪が多いとエサ場が限られるので一ヶ所に固まる。雪が少ないとばらけるので見つけにくい。</li> </ul>
地形や日当たり	<ul style="list-style-type: none"> <li>・南向きで日当たりの良い所(複数回答)。</li> <li>・見通しの良い所(外敵から逃げやすい)。</li> <li>・平らで木の少ない広い場所。あまり急こう配の所にはいない。</li> <li>・明るい所にしか出ない。</li> <li>・北の斜面にはあまりいない。</li> <li>・見通しの良い明るい尾根から少し下がったような崖下の平坦地などを寝屋にしている。</li> <li>・尾根沿いや川沿いから下りてくる。</li> <li>・木が多くごちゃごちゃして歩きにくい所はない。</li> <li>・夏は山の上の方にもエサがあるが冬は上の方の落葉樹の落ち葉と雪で下層植生がないため下の方に下りてくる。</li> </ul>
スギ林に関すること	<ul style="list-style-type: none"> <li>・スギ林の下は樹上に積もった雪が落ち固くて歩きやすいためよくいる(複数回答)。</li> <li>・スギ林ばかりの所は通常はない(複数回答)。</li> <li>・スギ林の中に寝屋(踏み固めただけのもの)がある。足跡が途切れるので見つけやすい。</li> <li>・雪が多いとスギの林内にいる。</li> <li>・寝床はスギ林の上の方で木の根の下にある。</li> <li>・スギ林で足元にササがある所を寝屋にしている。</li> </ul>

聞き取り調査の結果から抜粋

先ほど2017年度は雪が多く(具体的には2018年1、2月)、2018年度は雪が少ない(2019年1、2月)ことをお話ししましたが、実際のところ2017年度は2018年度に比べ標高の低い所で、ニホンジカの捕獲・目撃情報が多かったということがあります。

次に地形や日当たりについては、こう配の急なところは好まれず、見通しの良い所、日当たりの良い所が好まれ、「明るい尾根から少し下がったような場所を寝屋にしている」として崖下の平坦地がその例としてあげられていました。外敵から身を守り、また冬の寒さをしのぐためにもこのような場所が好まれていると考えられます。

最後に植生に関して見るとスギ林にニホンジカがいることが指摘されました。「スギ林の林内はスギに積もった雪が落ち固くて歩きやすく」、「寝床はスギ林の上の方で木の根の下にある。」として、スギ林を寝屋にしているとのことでした。ただし「雪が多いとスギの下にいるが基本はスギの下にはいない。」ので、積雪量が少ないと



利用するまでもないとのことです。スギ林内は冬季間においても枝葉があるために降雪が遮断されるので林内はスギ林外に比べ積雪が少なく、さらに樹上では枝葉に付着した降雪が寒気にさらされ凍りそれが落下し林床を覆うことで積雪面が固くしまった状態となり、ニホンジカの生息場所として都合が良いと考えられます。

### 冬のニホンジカの生態について

最後に冬のニホンジカの生態などに関してです。

食性の特徴として樹皮を食べることが多く、特にネムノキの樹皮を好むということです。それ以外にはササやアオキといった常緑のものを食し、また雪を掘ってドングリを食べているとの指摘もありました。

捕獲に関わる習性については、人間への警戒心があることが指摘されました。「ヒトの気配を感じると鳴き声で仲間に知らせ逃げていく」、「鳴き声がしてもなかなか姿が見えない」とのことです。また、雪の多寡によって捕獲のし易さ・難しさがあり、「雪が少ないとシカが歩きやすいため人から見つけにくい」、「雪がないとシカの動きが早くて撃てない」といったことがあるとのこと。そのほか「積雪1mくらいならラッセルして歩く。」といった、雪にも強いニホンジカをほのめかす指摘もありました。

### 終わりに

冬のニホンジカの生息場所や生態を知ることの目的のひとつに、ニホンジカの捕獲につなげたいということがあります。生息場所が特定できればそこで捕獲をすればよいわけです。

今回、狩猟者の皆さんから得られたニホンジカの雪との関係や地形や植生などに関するものを整理し、ニホンジカが冬、どんなところを好んで利用するのか、今後も調査を続けていきたいと思えます。

表3 冬のニホンジカの生態などについて

食性について	<ul style="list-style-type: none"> <li>・川淵に生えているヤナギ・ネムノキの皮、ササ、アオキを食べる。</li> <li>・ドングリ。積雪が30cmほどあってもほじって食べている。</li> <li>・川淵の木の皮を食べる。直径20cm前後の木を食べスギの皮は食べない。</li> <li>・捕獲後胃の中を見ると樹皮が多い。冬は樹皮を多く食べるのでは。</li> <li>・ネムノキが好物できれいに一周皮はぎしてある。直径約30cmの木を食べる。</li> <li>・草の根、ネムノキの皮を食べる。スギの皮はぎをする(高い位置)。</li> <li>・アオキやササを食べた跡がよくある。</li> </ul>
人への警戒心・狩猟	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ヒトの気配を感じると鳴き声で仲間に知らせ逃げていく。</li> <li>・鳴き声がしてもなかなか姿が見えない。警戒心が強い。</li> <li>・人に気づいた個体は「ピッ」と鳴く。ほかの個体も素早く逃げる。</li> <li>・耳がいいのですぐ逃げていき捕獲しにくい。雪がないと捕獲できない。</li> <li>・クマ鈴を付けて歩くとなわばりに入られたと思うのかシカが鳴くが、姿は見えない。</li> <li>・雪が少ないとシカが歩きやすいため人から見つけにくい。</li> <li>・雪が十分ないと足音で気づき逃げられる。</li> <li>・雪がないとシカの動きが早くて撃てない。</li> <li>・積雪1mくらいならラッセルして歩く。</li> <li>・雪が多いとあまり目撃しない→あまり動けないのではないかと。捕獲はしやすい。</li> </ul>

聞き取り調査結果から抜粋



冬のスギ林

周辺に比べ雪が少なく、雪が締まった状態にある。また、ニホンジカのえさとなるササが生育している。

## センターの動き（令和2年10月1日～令和2年12月31日）

- |       |                                    |       |                                |
|-------|------------------------------------|-------|--------------------------------|
| 10.4  | 白山まるごと体験教室「秋の市ノ瀬トレッキングと木の実観察」（市ノ瀬） | 11.20 | 環境省中部広域協議会自然生態系分科会オンライン参加（金沢市） |
| 10.9  | (株)西山産業外来植物除去作業指導（別当出合）            |       | ブナオ山観察舎開館（尾 添）                 |
| 10.12 | 竹腰永井建設(株)外来植物除去作業指導（市ノ瀬）           | 11.21 | 県民白山講座「謎解き白山」（白山市）             |
| 10.16 | 白山室堂・南竜ヶ馬場施設営業終了（白 山）              | 11.24 | 白山ユネスコエコパーク協議会第56回WGWeb会議（白山市） |
| 11.1  | 白山まるごと体験教室「手取峡谷で石ころ探し」（白山市）        | 12.12 | 白山自然ガイドボランティア研修講座（白山市）         |
| 11.6  | 市ノ瀬ビジターセンター冬季閉館（市ノ瀬）               | 12.15 | ジオパークガイド養成講座講師（白山市）            |
| 11.10 | 林業・森林交流研究発表会（大阪市）                  | 12.17 | 環境省中部広域協議会自然生態系分科会オンライン参加（金沢市） |
| 11.16 | トミヨ保全対策連絡会議（金沢市）                   |       |                                |



白山まるごと体験教室「秋の市ノ瀬トレッキングと木の実観察（10月4日、左）、「手取峡谷で石ころ探し（11月1日、右）」が行われました。



西山産業(株)による外来植物除去作業(10月9日、別当出合)



11月20日に開館したブナオ山観察舎。

### たより

中宮展示館は白山白川郷ホワイトロードの斜面崩壊によって、今年は開館することができず、市ノ瀬ビジターセンターは新型コロナウイルス感染拡大防止のため開館時期を遅らせました。ブナオ山観察舎も今年秋は例年通り11月20日に開館しましたが、来館者数や団体利用の制限など、残念ながら例年と同じように運営することはできていません。ただ、ブナオ山の動物たちは健在で、ニホンザルやカモシカなどが姿を見せてくれています。不自由な状況は続きますが、皆さんもブナオ山観察舎で動物たちの元気な様子を観察してみませんか。（平松）

はくさん 第48巻 第3号(通巻191号)

発行日 2020年12月31日(年3回発行)  
印刷所 前田印刷株式会社

編集・発行

石川県白山自然保護センター  
〒920-2326 石川県白山市木滑ヌ4  
TEL.076-255-5321 FAX.076-255-5323  
URL <http://www.pref.ishikawa.lg.jp/hakusan/>  
E-mail [hakusan@pref.ishikawa.lg.jp](mailto:hakusan@pref.ishikawa.lg.jp)

本誌は、再生紙へのリサイクル可能な用紙を使用しています

